海洋プラスチック汚染 現場からの報告 ⑤

ＪＥＡＮ事務局長
小島 あずさ

プラスチックフリーに転換する台湾

30年使用禁止へ、夜市にも変化

ＪＥＡＮは、「国際海岸クリーンアップ（ＩＣＣ）」のネットワークを通じて、海外の市民団体とも交流しています。日本で海洋ごみ対策のための会議を開催するときに海外での取り組み事例を発表してもらったり、相互訪問して一緒に海岸のごみ調査をおこなったりするほか、情報共有にも力をいれています。

ここ数年で、プラスチックによる海洋汚染問題への社会的認知度が高まり、世界の国々や国際機関や企業などからも、対策推進のさまざまな動きが出てきました。問題解決に向けた目標値もいろいろ掲げられていますが、ここでは、日頃の交流を通じて見聞きした台湾での取り組みのいくつかを紹介します。

日本でもようやく、国としてレジ袋の有料化の検討が始まりますが、台湾では2003年から有料化されていました。行政機関、私立学校、百貨店、量販店、スーパー、コンビニ、ファストフードなどの7分野ではレジ袋の無料提供が禁止され、その結果レジ袋の使用枚数を年間約20億枚減らしているとのことです。

昨年、台湾政府として30年までに使い捨てのプラスチック製品を完全に使用禁止にすると発表し、それまでの段階的な措置も示されています。台北市や新北市ではごみ回収は有料で、指定袋を使わなくてはなりませんが、一部のスーパーでは有料のレジ袋に指定シールがついていて、ごみ回収用に転用できるようになっています。

今後は市内のスーパーや量販店やコンビニで販売する有料袋は、全てごみ袋としても利用できる「両袋合一」のみに制限する予定だそうです。買い物客の多くはエコバッグを持参するようですが、エコバッグを忘れたり、たくさん買い物をして袋が足りなくなった場合には、指定シール付きの有料レジ袋を買う仕組みです。

さまざまな食材や雑貨類が並ぶ市場でも、繰り返し使える買い物バッグが用意されていて、袋を忘れたら有料で借りて使い、袋を返すとそのお金が戻ってくるようになっているところがあります。

また、台湾は3食とも外食する人も珍しくないところですが、街頭の飲料スタンドでも屋台の食べ物屋でも、以前は使い捨ての食器類が当たり前でした。ですが、30年の全面禁止にむけて、屋台の食器を使い捨てから洗って使うものにして「プラスチックフリー夜市」へと変わり始めた夜市も出てきました（台北市寧夏夜市）。

昨年、使い捨てのストローが話題になりましたが、町なかにたくさんの飲料スタンドがある台湾では、ステンレスや竹でできた繰り返し使うストローが以前から商品化されています。

タピオカドリンク用の太いものもありますし、洗うための細いブラシがセットでケースに入っている商品もあります。食べ物のテイクアウト用には、シリコーン製のフードバッグがありますし、店側が用意する持ち帰りパックもプラスチックから紙製に変りつつあるようです。日本では、食べきれなかったものを持ち帰ることに、飲食店側が難色を示す場合がありますが、台湾では残ったら持ち帰りは当たり前で、会食のときに持ち帰り用の容器を準備していく人も珍しくありません。

花蓮県では、いち早く、公務員の使い捨てプラスチック製品の使用が禁じられたのだそうです。公務員が率先してプラスチックの使い捨てをやめ、住民の手本となるようにという意図があるとのこと。こういったことは、日本でもどんどん見習ってほしいものです。

そして、空港や公共施設などには、「冷水・温水・熱水」を汲むことができる無料の給水器が設置されています。熱水は、お茶や赤ちゃんのミルク用に使えますし、安全のためのロックボタンもありました。水道水がおいしく安心して飲める日本ですから、給水スポットが増えればごみも減り、一石二鳥だと思います。

レジ袋を忘れると、ごみ回収用の指定袋を購入し持ち帰る仕組み

空港や公共施設などに無料の給水器が設置されている